

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(二) 『〔恋塚物語〕』 翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	三田國文 No.46 (2007. 12) ,p.43- 54
JaLC DOI	10.14991/002.20071200-0043
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20071200-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陽明文庫蔵「道書類」の紹介(二)

『恋塚物語』翻刻・略解題

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『恋塚物語』を紹介する。本書については、外題・内題ともに記されておらず、奥書なども有していない。前号においても述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類^(一)の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間(一五九六—一六二四)の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、本書についても、おそらく同じ時期に書写されたものと推察される。

本書は、『平家物語』読み本系に見られる文寛発心譚に基づくお伽草子『恋塚物語』の一伝本である。『恋塚物語』については、明暦頃の絵入り刊本と、高山市歎喜寺に蔵される、寛永年間(一六二四—二九)頃の写しで『滝口物語』と題される写本の二系統が知られている。本書は、故事説話を多用する点や渡辺の橋供養の際一目ぼれた盛遠が火事騒ぎに粉れて女を見失ってしまう点では刊本との類似性が指摘できる。一方、女主人公に名前が与えられていない点や夫の左衛門が女の死後「もんしやうはう」と改名する点など、歎喜寺本との共通点があげ

られ、両系統それぞれとの関連が推察されるものの、より後者に近いと判断される。ただし、簡素な本文の歎喜寺本に比して、冒頭に著名な恋愛説話を列挙するなど、独自の記事も多く見られ、現存伝本のなかでも最古写にして最古態と推察されることから、きわめて貴重な伝本として位置づけられる。なお、詳細については、別稿にて検討したので参照されたい。書誌については、以下のとおりである。

- ・ 函架番号 近ト一七二一ワ
- ・ 形態 写本。一冊。仮綴じ。
- ・ 寸法 縦二八・一糎。横二一・二糎。
- ・ 表紙 本文表紙共紙。楮交じり斐紙。左肩打付墨書「いりさまの御ほん」との小書き(本文と別筆)あり。
- ・ 丁数 墨付二十九丁。
- ・ 本文 半葉九行。漢字平仮名交じり。字高二三糎。
- ・ 内題 なし。
- ・ 奥書 なし。
- ・ 印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。

翻刻に際して、本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。

注

- (1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、前号掲載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」(『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年)、拙稿「説法・法談のラコ絵―『幻中草打画』の諸本―」(『仏と女の室町 物語草子論』笠間書院 二〇〇八年)を参照されたい。
- (2) 拙稿「比丘尼御所文化とお伽草子―『恋塚物語』をめぐって―」(徳田和夫氏編『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年刊行予定)。

【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜りました、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げます。また、本書の翻刻・考察に際しまして、御教示賜りました、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は、科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部です。

【翻刻】

それ、よくしきむしき三かひのうち、たいらんしつ
けのしやうのあひた、しやうしてはし、してはしやう
し、いつれのしやうをかうけさりける。されは、われら
たま／＼三あくしゆのほうをまぬかれて、さいはひに

にんげんのみをうけ、まれにふつぼうるふのときにあ
へり。よろししやうしけたつのみちをもとむへし。
一たひけうしゆも、もつはらこれをいましめたまふ
事、さいしよよりおほりにいたるまで、三こくのそし
もともにこれをおしへたまふ。およそれんほのかみ(1オ)
のうへに、かけをならふるもはせをのはのやふれ
さるほと、ゑんわうのふすまのしたにあそひたわ
ふるも、草露のいのちのきえさるほとなり。す
へて女人はとんあひのまうねんたり。このゆへに、一
ねん五百しやうけんむりやうこうととく。なんし
は女人のためにして、とくたうをさまたけ、によにん
はなんしのゑんにして、しやうしをとこふるとかや。
しかれば、てんちくのしゆつはかは、きさきをこひて
ほむらとなり、わかつてうのきそうしやう、恋ゆゑあを(1ウ)
きおにとなる。たいとうの一きやうあしやりは、やうき
ひになをたつて、くわうこくへなかされけり。ほんてう
のしかてらの上人は、京こくのみやすところをわり
なく恋たてまつりてこそ、御てはかりをたまはり、しん
やうのひわのあるしは、むなしき舟をのみまほる、
松浦ののゐしのすかたは、もろこし舟をしたひけり。
そうきよくを恋し、おんないへたてのかへによりて、
三とせかうちにはかなくなり、ゑんあんといひしおん
ないちやうしやうしよにあひおくれ、ゑんしろうの(2オ)
さうけつつのよのなかきに、夜もすからなきかな
しみて、なれしころもをひきかさね、わかみにふれ

けれど、そのうつりかのなきまゝに、むなしき月
日をうらみつゝ、十二の秋をおくりて、つゝにはかなく
なりにけり。すかたありさま人にこへ、ことさら色を
このみつゝ、なさけをもらさゝりしかは、女房の心
をかけぬ事もなし。かのかうわうのきさきにそく
てんくわうくと申は、あまたのなかにすくれて
御心もはなめき給へは、くもるの月かけをほのかに「(2ウ)
見たてまつりて、心そらになりけり。一かたならぬもの
おもひ、おつるなみたのたまくしけ、あけくれなけきし
つめとも、そのかひなきをかなしみ、身をかき草のね
をたへて、さそふ水をまつほとに、たくひなかりしあわ
れさは、いはのしつゝや見えにけん。こゝろのうちにし
られて、さこそはおほしけれども、たやすき御事なら
ねは、なくさめ給ふ事なくて、うちすきたまひける
ほとに、いかなるひまやありにけん、ゆめみるほと御ち
きりなか／＼よしなかりける。たかひにいひてしのへ」(3オ)
とも、くものかけはしとたへして、ふみかよふへき道
もなし。なを人しれぬものおもひ、とりかさねたる
こゝちして、ものやおもふといふ人もなくて、月日をふる
ほとに、いうせんくつといふふみに、おもひの色をあらは
して、きさきにたてまつる、ありかたくおほえける。あ
るひは、りうしんのかたちをかんせんてんのかへにうつし、
やうきひのすかたをはほうらいきうにたつねゆく。とし
に一たひあひみしは、そとおりひめのいにしへ七夕つめも
ためしあり。空こそなめられければまつよむなしき」(3ウ)

おり／＼は、月に袖をかたしくうちのはしひめなるか
や。そうしの字をあらわすは、くわんせうといへる物と
かや。さるさわのいけにしつみて、いくたのかわに身をな
け、そののみくつとなりしは、よしなき恋のゆへとなり。
しやうほのたけをそめしは、恋ゆゑなかなみたり。
なみたにそめしたもこそ忍ふすりともなりしか。
ちつかにたてしにしきゝは、もゝよのしちのはしきかき
のさわへにせりをつみし人、ゆめうつゝともわかさりし
はいせのいつきのみやとかや、あかぬわかれは物ならて
ふけゆくかねをうらみつゝ、あさまのたけふしのねた
えぬおもひのけふりたち、よしなしとはおもへとも、か
くてこれをあんするに、ふつほうにきするかたより
なり。あひへつなけきよりおこりて、ほたひをもと
むるゑんとなり、れんほのかなしみにありとかや。かや
しやうの月かけ、せんたんのけふりにかくれつゝ、しゆふ
うせんの日のひかり、さうしゆのえたにいりぬれは、かしや
うあなんとうのしやうもんは、なみたをなかしひれふし、
みろくもんしゆとうの大師は、かうへをうなたれて「(4ウ)
たんそくす。しまわうこんのそんようを、二たひ見たて
まつらす。かれうひんの御こゑを、又きく事もなけ
れは、しふのしゆもこと／＼く、てんにあふき、ちにふし、
なきかなしみけるとかや。およそしよきやうのいまし
めはのかるゝところなけれども、けんかいゑれんほにし
やうかつかうしん、たのもしくこそおほへける。しかれば、

みかわの入道しやくせうは、あしやうれんほのなけきより、うきよをのかれんかためにこそ、しやうりやうせんにもいりたりける。たまつしまの明神は恋ゆへかみとあらはれ

「(5才)

あしから山のしんめいは、こひせはやせぬへしやとらみ給ひけるとかや。みわのやしろのすきのかと、すみよしのきしのかたそき、かしまの明神はかたむすひなるちきりをうらみ給ひて、かものかわせにせゝみそき、恋せしといふことをは神さへうけぬ事もあり。なりひらのちうしやうは、大日のけしんなりしかは、二生かひのあひたに三千よにんにあひなれ、おのゝこまちはかたしけなく、くわんおんのけしんなりしかとも、しよにんの心をなやませり。そもくゝこんちのゐんの」(5ウ)

御とき、ゑんたうむしやとをふさは、わたのへたうなりけるか、とをふさかそくなんに、ゑんたうたきくちもりとをときこえしは、すかたありさま人にこえ、なまめきすける心まで、いちはやかりし人なれば、なをきゝかたちを見る人はみな、あひねんをおこしけり。しちくりよりつのさひかくも、たけくいさめるこゝろまで、人にそすくれたりける。しかるに、すきにしきうあん六年五月十八日、津のくにわたのへの橋のくやうありしとき、あんよりふきやうをくたさるゝ」(6才)

國のあんなひしやたるうへ、ゆゝしきさいしんなればとて、しやうねん十八に彼もりとをゝくたさるゝ。しかれば、かしくへくたるに、なにはいりゑの事なれば、あし

の上葉をわたる風、みきわになひくしらなみの、よるにやかてなりぬれば、ふりすさみたるさみたれの、くものまよひの月見えて、しほ路にあさるあしたつの、月かたふけはくちすさみ、やそしまかけてこく舟の、あとのしらなみかつきえて、山ほとゝきすの一こゑ、をりにふれたるあわれさに、笛うちふきて」(6ウ)

たゝすめは、さらはみちとをくして、あしへをさしてこく舟に、つまをとよしある琴のねの、まつふくかせにたくへて、ほのかにきこえけるほとに、もりとを笛をふきさして、いかなる人のひくやらん、はくらくてんのいにしへ、江上のひわのねをたんする人ととひけるも、いまこそおもひしられける。いつくをさしてゆくやらん。こゝろもとなく見るほとに、こきつらねたるとも舟の、あひちかくにしたかひて、はしのつめにつきにける。もりとをすこしたちよりて、い」(7才)

かなる舟のうちなると、あまたのなかを見るほとに、女房おほくとりので、よしあるさまの舟なれば、あわれいかなる人やらん、かたちを見はやとまちしかと、月かけにしに入ぬれば、空おそろしきさつきやみ、さしもみしかきなつのよのあくるをまつこそひさしけれ。やうくその夜もあけゆけは、ふねのうちの女房、こししよせてのるほとに、いまこそ見るへきときなれと、うかゝひたちよれとも、きちやうのかげよりのりしかは、まちつるかひもなくしてにう」(7ウ)

はうさしきに入にけり。ともの女房十二人をのく

つまをとゝのへて、ゆゝしきさまなりしかは、人々
めをおとろかす。もりとを心あくかれて、物のふきやう
をさしをき、きさきをとかくうかゝひたつそよし
はなき、しかるへき事にや、なはいり江のうら
かせに、すたれのひまそあきたりける。そのうちに
見てあれは、二八にあまりてはたちにたらぬほと
なるか、ふようのまなしりこひありて、りうはつかせ
にみたれて、あをやきのいとつかしきふせひな」(8才)
り。そのすかたたえにして、かたちゆふなるありさまは
あきのはらのをみなめし、そのうのなしの一えたに、
雨こそそゝきけるとかや、はむあんしんかはゝかた
のめい、さひきけひかをともうとゝもいひつへし。
けんしの物かたりには、によさんのみやのきんをしら
めたまひしは、きさらきのあまりの青柳のはつかに
したりそめけるを、うくひすのはかせにもみたれ
ぬへしとたとへられ、をのゝこまちかかたちを、やう
きひりふしんにもたとへらる、さしきのうちのあるし」(8ウ)
をはたとへをとるに物そなきと、おもひつゝけてたゝ
すめは、をもはゆけなるけしきにて、たもとをかさしに
けるそはよりすたれをひきなをす。そのゝち、又も
みえされは、夢にもしらぬみちのくの忍ふの山にふみ
まよふ、こゝろのうちのみたれは、さこそとおもひしられ
ける。さいこちうちやうなりひらの、うこんのはゝのひ
のひまより、ほのかに人を見そめしかは、みすもあ

らす、見もせぬ人となけきしも、かくやと
思ひしられて、やうくくやうもはてぬれば、さしき
よりもたたんところを、もし一めもや見るとて、う
かゝひてたちけるほとに、そのへんちかきさいけ
に、にわかにくわきひ出して、しやうけひしめくその後、
ゆきかたしらすなりにける。ふなつのかたを見け
れば、舟もあらずとこたへける。はしのひしりにとは
するに、さやうの御舟はみやこをさしてといひければ、
もりとをみやこのほりける。わかしくしよにはつ
きしかと、一夜をたにもあかしかねうはの空にそあく」(9ウ)
かるゝ、たえぬ思ひをしるへにて、らくやうへんとな
れいふつれいしやをかみても、あひみんことをきねん
する。その日のくれは、ひかし山きよみつにさんろうして、
このよしをいのれは、くわんおんの御りしやうあらたに
そ侍りける。さくらの花のいつくしく、まことさかり
に見えけるを、もりとをにとて給るを、たきくちゆ
め心におもふやう、花こそさらによしなけれ、みた
く恋しき人をは夢のうちにも見ぬ事よと、を
もふ心のなさけなく、花ををしおり、ふたひより
したへすてるとおもひて、ゆめうちさめてなにとな
く、こゝろも空にきよみつをたち出て下向する。や
さかのたうをはひして、きおんとのにまいりつゝ、させ
ひをふかく申て、長楽寺へさしうつる、ほつせうし、
ほうしやうし、しらかわにかゝりて、をはら、しつはら、さ
しすきて、さかのおくはほうりんし、往生院をは

いてやうくゆけば、にし山うちすきて、これやこの
北野の天神、こうはいとのゝ名のみのこりて、いまは
なし。ならひの岡のまつ風、きんのねもそれかと」(10ウ)

心ひかれてなかむれば、まつの木すゑの藤なみのかゝ
まりゆくにつきても、うら山しくおもへは、そゝろになみ
たとゝまらず、くわりんしとかきては、うつまきてらと
かや、一むらあるさとをは、なとおほるとはなつけけん。

かつらの里にてる月は、いつも物うくおほえて鶴舟
にともすかゝりひの、きゆるあとにつきても、ことさら
こゝろほそくして谷のたうみねのたう、撰津のさと
をうちすきて、その日の暮はおとこ山まいりて、

南無やはちまんたいほさつ、こよひのつやのりし」(11オ)
やうには、たとひちきりはうすくとも、この女房のあり

ところかならずしめし給へとて、かひとくけたつく
しゆしやうここうはちまん大ほさつ、たのもしくそ
思ひける。なひしやうけようのひくわんのかたし

けなきをくわんして、りやうせうしやうのいにしへ、うき
世をいとひ給ひしに、女房おもひにたえかねて、はつ

せの山にこもりて、この人のゆきかたをかならず
しめしたまへと、ほとけにきねん申ける。むかしの人の
こゝろまで、思ひつゝけてわか袖のしほるほとにぞ」(11ウ)

なりにける。ましろむひまのあらはこそ、夢に心も
なくさまん、うつゝすくなく御まゑを、いてゝむなし
くかへりしかは、いつくをたのむかたもなし。こゝやかし
こにやすらひて、里あるところくゝのさいけのな

をそたつねける。とはのあたりたゝすみて、この世
をまつ山のすそ、こひつかといふところに、はにふ
のこやにやとをとり、ふけゆく夜半のなくさ

みに、笛うちふきてありければ、そこもしらぬ
琴のねのまちかきほとにきゝゆれば、いかなる人
のひくらんと、つまをとゆかしきゝけるに、ふつ
てしあなんそんしやのしやうかしたまひしに、かせうは
たつてまひをまひ、たいしゆきんならかるりのこと

をひきけるも、かくやと思ひつゝけて、心をすま
しきく程に、ことのひきよくもおはりぬ。宿のあ
るしの申やう、御みを見たてまつるに、たゝ人ともを
ほえず、いまの笛のいやしきわれらかみゝにたに、

よしあるさまの御笛とうけたまはりて侍るなり。いつ
くの人そとひければ、つくしのものとこたへける。」(12ウ)

その夜もすてにあげぬれば、あるしのおとこ出あひ、
むかひにみゆるかとのうちは、きやうふさへもんとのとて、
きやうけの人のしゆくしよなり。さへもん殿のこせん

は、かたちもたえにうつくしく、きこゆる琴のしやう
すなり。すきしころ、なにわへのはしのくやうのありし

とき、御ちやうもんのためにとて、くたらせ給ひたり
しに、舟のうちにひきたまふ琴のつまをと聞

からに、いやしきしつにいたるまで、心ひかるゝふせひ
にて、なかめかちにて侍るとうけたまはると申せは、もり
とをきくにあやしくて、くわしくたつねとふ程に、

「(13オ)

御としは十八ちにおくれ給ひて、はこせんはさまをかへ、にしちてうにましますと、くわしくかたりけるほとに、このよしをきよて、琴のつまおとて

の程まきれつへくもなければ、大菩薩の御

りしやうこれなりけりとよろこひて、やはたのかたをふしおかみ、いよ／＼ふかくせひして、みやこのかたへのほりける。よしなき事にひかれつゝ、くる

〔13ウ〕

れはとはへそつきにける。月ふけ風すさましきをりふし、琴のひきよくをたち聞、よなく／＼つもるなけきには、おつるなみたの玉くしけ、ふた月はかりはへぬれとも、たゝいたつらにすぎのかと、あけ暮をのみ世のなかに、ふるかひもなきあは雪の、きゆへきほともなりぬれば、谷むらききにはうとくとも、ゆかりの草をたつねても、なくさめはやと

思ひて、にしの京のほとりに聞しあたりにやすらひて、そゝろに笛をふくほとに、しかるへきことに

やあはれむ人そありける。いつくの人そとひ
〔14オ〕

ければ、いかなるものにて候か、しかるへきところにほうこうせんといひければ、あるしのにこういてあひて、御身をよく見申は、かたちもたえにいわしく、さきにきし笛のをとも、よにむつましく侍るなり。

さきのよのおやこのちきりはこれなりけりとお

もへは、いまよりは尼かもとにをかんは、いか／＼はおもひ給ふとよし／＼にのたまへは、もりとをしさひをう

ちきよて、心をつくす女のは／＼のもと／＼きくから

にあけくれこゝろにたかわす、おやこのちきりをなし〔14ウ〕つゝ、ほうこうするそあはれなる。かくて日かすをふるほとに、とはよりのおとつれのとき／＼あるをきよてこそ、いましほものおもひなくさむたくひなりけると、あるときうちの尼公のつれ／＼の

あまりに、とはの御かたに琴をひかせて、殿に笛をふかせ、思ひ／＼にきかはやとのたまひて、とはへ

ふみをやられける。女房かしこへくたりぬ。たきくちこゝをいたしより、あるにもあらぬこゝちして、尼こせんおほせありけるは、久しく見たてまつらねは、〔15オ〕

恋しくおもひつるうへ、笛のしやうすの侍れば、琴

ひきたまへとのたまへは、うけたまはると申て、女房しやうしをへたてゝ、ことをそゆるくひきならず。

もりとをこしたる笛なれば、はむしきてうにより

あわせ、こゝをきはとそふきすます。女房ことをひきさして心のうちに思ふやう、ふしきやな、

なにわのはしのくやうのときこそ、かやうの笛をは聞きかた、心のうちにいかなる物そとありしかは、はしめ

やうをかたりて、いつもこれに候へはそれへもつねに〔15ウ〕めされよ、うけたまわると申て、その日もすてに

暮ければ、女房とはへそかへりける。たきくち、さても

あらねは、なをたち出て恋衣、はる／＼こしを見をくり、うちたえかくともいは／＼やと、思ふこゝろはつもれ

とも、すたりはてぬる身にあれば、そのかひなくてさてすきぬ忍ぶおもひのくるしさを、とふ人たにも

なみたかわ、そてをしからみせきかねて、かなふへくも見えされは、尼公このよしあやしくみなして、

いかなることのおこりにか、よのつねのいれひとは「(16オ)見たてまつらぬふせひなり。かやうに、たのみたのまれて、たかひにおもはん事は、何かはへたてあるへきと人をのけてそとひ給ふ。もりとをはつゝむとすれともれにけり。日をまつほと露の身の、かくて消

なはつみふかし。しらせてこそとおもひては、はしめなにはのこのね、ひかれそめける事ともより、きんちう

のほうこうも、さらに物うくありしかは、うわの空なる思ひを、れいふつれいしやにきせひして、せめてあたり

のゆかしさにそれよりこれにしこうする。すきしころ」(16ウ)の御出ししやうしをへたてし、わりなさまてこゝろま

よひにかき暮て、いまをかきりのかなしさを、かたりつらぬることのはを、むすめのうへにきゝなして、おもひ

のほかの事なれば、とかくの返事におよはすして、尼公はうちへそいりにける。もりとをか心のうち、とふ

につらさのふせひして、いよく忍ひかねにけり。かくて、もりとを日にそへてよはりゆくほとに、あ

まこせん心のうちにおもふやう、かくてうきめをみん事も、ふひんの事なればとて、わかいたわりにとり「(17オ)

なして、とはへふみをそやられける。女房いそききたりつゝ、尼公いてあひ給へは、御いたはりのよしをこそ

うけたまはりて侍るに、こはいかにとありしかは、しはしは返事もなくして、よにためしなきまうし事はゝか

りいりて候へとも、人をたすくるならひは、なにかはく

るし侍るへきこそなから、たゝめ見せさせてたまへとのたまひて、かのもりとをかりさまをくわしくかたり

たまへは、女房はこれをきゝ、ひとへにみをそうらみける。せんせのしゆくこういかなればかゝることをは」(17ウ)

聞らんとて、女房さしきをたちければ、尼公たもとにとりつきて、みつからおやこのなかなれば、申につけ

て人気なく、よにためしなきはゝかり入てさふらへとも、人をたすけんためにこそ、かくとも申いたしたれ。

かなふましくはちからなし。のちは御身とはおやこのむつみあるましと、ふけうのことはありしかは、女房せひ

にまよひつゝ、なくよりほかの事そなき。おやのおほせをそむきて、契りをかれにむすはても、

おほせをそむきて、契りをかれにむすはても、けにつみふかき事なれば、ふけうのことはおそれ

つゝ、おやのおほせにしたかひけり。尼公はこれをよろこひて、もりとををよひよせて、へたてのしやうし

をあげあわせ、尼公うちへそいり給ふ。たかひにあひあふ心のうち、夢にゆめみるこゝちして、はしめな

にわの事ともを、なさけをふかくそかたりける。女房ときゝこのよしをきゝても、とかくの返事に

およはず、きぬひきかづきてなくよりほかの事そなき。そのときもりとを、いかにやきこしめせ、

なになににて御すかたをくもみの月のことくにて、」(18ウ)

ほのかにみたてまつりて、心のうちのくるしきをつま

はやまともなりぬへし。うつまいなとやわたつうみ、

はてしなくともうめさるへき、この事むなしくなる
ならば、しやうたう一ひやくこうのしやしんのこうをへて、
つるきの山をおりのほらん事のかなしさよ。又御こと
もいくつの年のなるとき、さへもんのせうのつまと
なり。又いくつのとしいつよりも、もりとをかふさひ
となるへしと、かねてよりもひもんのふたにつけて
こそ侍るらめ。されはいとふともいとはれし、けつるとも

「(19オ)

けつられし、なさけのみちをしる人も、よにためしある
物をききもつふさにきこしめせ、なりひらの中将は、
あねになさけをこめてこそ、くりはらやあねはの松
とよみてより、うたのたひともなりしなり。けんしの
大しやうは、おはになさけをこめてこそ、さらしなやおは
すて山ともよみしなり。いつみしきふは、たうめいにな
れそめてしほのひるまのつれ／＼に、なに物そと
とひければ、五てうのはしつめのすて子なりといひけ
れば、いつみ式部はこれを聞すてけんときもありさまを

「(19ウ)

くわしくたつねとふほとに、うふきぬのかたはしにむ
つせなりしやと、かきてありしとかたれば、うたかひところ
なく、けんさいの子にてあるよとおもひて、おやこのかひ
をはしりけれとも、なをなつかしさまさりつゝ、ちきり
こめしふうふのみちなり。されは、おんなとなり、おとこ
のけんかゝらぬを、はしたなきしやしんとて、ちく
しやうにたとへて、人のれつにはあらざるなり。山とな

りて、きりかすみのかゝらぬ山や侍るへき。又はんし
やく岩はかたしとは申せとも、雨つゆかさなればしる」(20オ)
しもありてこけもむす、られうのたもとはかさぬる
にしたかひて、なつかしさますとかや、たつせ川のすみ
は、するにしたかひて色ふかし。つのくにやなにはの
あしのねにふして、みちのくや忍ふのさとのすり衣、
きつゝなれなはいかはかり、われもうれしとおもわん
とかきくときいひければ、女房あわれにきゝなして、
とき／＼返事するほとに、なをゆくすゑの事まで
もたのめをかとせしほとに、うけひくけしきのな
かりしに、かさねてとかくいひければ、せんかたなさのあ

「(20ウ)

まりにや、ひとりにたのみのまれて、又ことさまの
ふるまひは思ひもより侍らす。あからさまのけんさんも
おもひのほかのことなれとも、我うきさまをも御らん
せは、御おもひもややみなましと思ひ侍りければこそ、
これまでもまいりてさふらへ、まめやかにさやうの事
にて候はゝ、たのみつるものにもいとまをこひてといひ
ければ、もりとをもちひかたくして、しひてまことを
いひければ、女房こゝろにおもふやう、いはきのことくて
さてはては、おやの心にたかふへし、ちきりをかれに」(21オ)
むすひなは、ていちよのほうにもれぬへし。ふたつの
みちをとにかくに、身をなきものになしはてゝ、おと
このいのちにかわらんと、ふかくそ思ひさためける。
いとまのこともかなはずは、たのみ侍る我つまをうしな

ひたまひてさふらは、うちたへひたすらにしたかひま
いらせん。いかはおほしめさるゝと、うちとけたるけしき
にて、くわしくかたりけるほとに、もりとをはこれを書き
きうつへきしたひを、いかにとてかたとひしかは、とは
の宿所のありさまをくわしくかたりをしへつゝ、まつ」(21ウ)
へきよしをちきりては、やかてとはへかへりける。
あしたのどこにおきぬつゝ、とまらぬけさのきぬく
にむなしき空をなかめつゝ、その日をまつこそ久
しけれ。すてにそのよにもなりしかは、さへもんのせう
のもとへは京よりまれ人きたりつゝ、一日しゆゑんを
くらすまに、女房はありし所にうつりて、けふを
かきりの事なれば、心にうかふもしほ草、なみたな
からにかきあつめ、日ころてなれし物なれば、さいき
のこをひくよりも、袖のうへゆくなみたかわ、し」(22オ)
つみはてなんみのちを、思ふこゝろつくしにこ
かれてのみこそかなしけれ。せきやうにしにかたふけ
は、みやこの人もかへりける。さへもんのせうはうちへいり、
けふはなにとやらん、いつよりもへんしもはなれ
かたきに、おりふしまれ人きたりて、思ひのほかにとい
ひければ、心つよくはしのへとも、おつるなみたにむ
せひつゝ、わらわもまきらかすかほに袖をあてけれ
は、このよしさへもん見るよりもうちわらひ、おんない
はかなきふせひかな、見えたる事もなきにさへ、けし」(22ウ)
からすさよといふときぞ、いとゝなみたはずゝみける。
さへもんとゝ、御くしにほこりのかゝりて侍るに、かみを

けつれといひければ、御まゑの女房、ときみたす
なこりのためとやおもひける。みつからよりてけつり
しか、おつるなみたのかきくれて、くしのたてともみ
えわかす。めのとをよひてけつらする。又たちより
て夜もすから、そのうは玉のくろかみをやゝ久
しくかきなてゝ、まゝとむほとをまつほとに、せん
こもしらすそふしにける。いまはとおもひけるほとに」(23オ)
かつらにかみをとりにくして、もとゆひすそへおしさけ
て、まくらのほとにをしいたす。そのゝち、二さいにな
りにけるを見るよと思ひしに、なみたやいたくこ
ほれけん。又おもてをもむけすして、めのとにい
たきとらせつゝ、さても日ころはいたわしく、ちりた
にもふれさりける、ひすひのかんさしのたけにあま
りたるを、てつからこれををしきりて、かきをくふみに
そへつゝ、しやうしのうちにそをきたりける。のこれる
かみをとりあけて、おとこのえほしをおし入て、おふ」(23ウ)
くちたわやかにきなして、いまやゝとまちたりける
心のうちこそかなしけれ。やうくゝときもうつり
て、やくそくのほとになりしかは、もりとをうちを
こゝろさし、忍ひいりて見れば、しとみやりのと
かけかねもかけさりけるほとに、いよくゝすゑも
たのもしく、うれしさたくひもなくして、こしのかた
なをぬきもちて、ひやうふひそかにをしのけて、
枕ほとをさくりしに、ふうふ二人のかたちあり。え
ほしおふくちさくりわけ、いまわと思ふところにさす」(24オ)

かおんなの身なれば、おそろしくやおもひけん、すこしはたらくやうなるを、おとこのをくるところへて、むねのあひたにのりかゝり、たゝみいたしきとをれくゝと三かたなきひて、そのゝちかへすかたなきひをとり、ほんくわひとけぬとよろこひて、かとりほかへはしりみて、みちのほとりのたのなかへ、くひをはふかくかくしつゝ、京へいそきのほりける。これを夢にもしらすして、さへもんのせうはうたれぬと、とはよりいまやつくとまちける心のうちせおかしき。夜もすてにふけゆけは、さへもんのせうねきめして、女房おとろきたまへとて、さうのわきをさくりしに、ひたりのわきにふしにけり。あやしきさまにさくりなし、人やあるといひしかは、うちよりしそくをいたしける。くひなき物に見なしつゝ、きもたましひも身にそわす、あきれまとへるさまは、けにあわれにそおほえける。おなしみちにとかなしみて、しかひをせんと、かなしみしける人おほければ、さへられてむなししかひにとりつきて、こゑをあけてなき」(25才)

にとりなして、うつろひやすき花かつら、心かけとちきりしを、思ひもよらぬ青柳の、いとさりかたき事なれば、御いのちにはかわりぬ。おさあひもの、ゆくすゑに、我のちのよをとふらへと、ふてもしとろにかきなして、いもせはにせの契りとたのめをかくる事までも、さまくくわしくかきをきけり。その夜もすてにあけしかは、京へもかくとつけにける。尼公はかなしき身にあまり、いそきとはへそくたりける。もりとをともにゆきけるか、けろうのつかいしたるほど、いひかひなきものにもあらし。さへもんのせうといひけるを、聞たかへてそあるらんと」(26才)

心のうちにおかしくて、こへゆきつきしかは、尼公はうちへいり給ふ。むなししかひにとりかゝり、こゑをあけてなきなげく。そのときあやしきゝなして、いそぎ路たうへはしりいて、をきつるくひをみてあれは、とし月こゝろつくしける女房のくひにてありければ、さてはおとこのいのちにかわりけるよとうち思ひ、たち所にたれをふし、しかひをせんとしけるか、心にかくしておもふやう、とてもむなしくなるならば、かのさへもん殿のてにかゝり、ともかくもとおもひて」(26ウ)

むなしきくひをとりあけて、たもとのしたにかくしつゝ、かしこへとてそかへる。いかにやさへもんのさこそは思ひ給ふらめ、御ふんをうちてそのゝちは、うちたへあらんとありしを、もりとをまことゝおもひて、こよひこれにきたりて、御へんくひとこゝろへてとりつる

くひは女房のくひなり。御へんのいのかにわらん
と思ひけるをしらすして、こよひこれにきたりつ

つ、せんひくたきてかひなし。しかしなからもりとをを

御へんのかにかけたまへ、なをしもうちたへちきらぬ」(27オ)

われらたにも、いのちにかへてかなしきに、ましてやまう

さんかひろうとうけつのちぎり、へんしもたちわか

れさる、御へんの心のうち、さこそはかなしかるらめ、と

もかくもわれらははからせたまへ、むなしきくひを

とりいたす。さへもんとのをはしめとして、あつまりゐ

たる人々みな一たうにこそをあげ、いましほそなき

なけきける。さて、さへもんこしのかたなをぬきもちて、

ひたりのてには、たきくちをおさへて、すてにくひ

をかゝんとす。ひきあをのけて見てあれば、二十は」(27ウ)

いのちをおしむけしきもなし。せんきまんきをこゝろ

しても、いまのおもひにくらふれば、なかゝものゝかす

ならず、この物をころしても、しやうりやうないりのく

けんをおもひやるこそかなしけれ。ひとへにたすけ

申すへし。これをしゆつりのはしめとして、御へん

ももとゆひきりたまへ、われらももとゝりきるへし

として、さまゝくわしくかたりしか、やかてもとゝり

きりければ、もりとをもおなしさまにそなりにけ

る。かいのししやうをたつねつゝ、しゆつけをとけて

さへもんはもんしやうはうと申なり。もりとをは

もんかくと申て、たかおのてらにのほりて、おこなひ

すまして、ゐたりけるをこそ、ふつほうのいにしへを

はるんやうのふたつにかたとり、てんちのにしもおな

しく、又三かひもかくのことし。ふもおんほうによ

せんほう、ひもおんしんによたひかい、これみなるんやう

のもとひとせり。よしなき恋のおわりこそ、しゆ

つりのはしめとなり侍りける。これはいけん

の人々は、ねんふつ十八んつゝ御ゑかうあるへし。

」(28ウ)

」(29オ)